

練馬区立中学生被災地体験学習 報告書

(平成 25 年 3 月 27 日～28 日)



平成 25 年 3 月 28 日 (木) 宮城県岩沼市内にて

練馬区教育委員会

はじめに

このたび、平成25年3月27日・28日に実施した宮城県亶理町における区立中学生被災地体験学習の報告書がまとまりました。

この事業の目的は、平成23年3月11日の東日本大震災から2年が経過し、被災地は徐々に復興しつつあるものの、その傷跡が多くの所で残されているなかで、区立中学生が被災や復興の状況などを現地で直接学ぶことにより、震災の歴史を自分の目で確かめ、伝えていくとともに、災害時における自らの役割を考える機会とすることにありました。

事業の実施にあたり、亶理町役場や教育委員会、荒浜中学校の先生方のご協力をいただき、津波による被害の状況や復興に向けた取組み、仮設住宅での暮らしなど被災地の状況に直接触れることができたとともに、貴重な話を数多く伺うことができ、有意義な学習の成果が得られたものと考えております。

その内容を報告書にまとめ、全区立小中学校に配布することといたしました。

この報告書により、貴重な学習の成果を共有し、災害時等における自らの役割を考える機会としてご活用いただきたいと考えております。

また、被災地体験学習に参加された生徒の皆様は、学習の成果を振り返るとともに、体験学習を通じて考えた自らの役割を、気持ちを新たにして引き続き果たしていく機会としていただきたいと思います。

いずれにいたしましても、復興に向け力強く取り組んでいる亶理町の皆様方に一方ならぬご協力をいただき、成果が得られましたことに深く感謝申し上げますとともに、練馬区としてできる限りの支援を今後とも引き続き継続してまいりますことをお誓い申し上げます。報告にあたっての御礼の言葉といたします。

練馬区教育委員会

教育長 河 口 浩

目 次

はじめに

練馬区教育委員会 教育長 河口 浩

目次

実施概要	1
引率者	2
参加生徒	3
巨理町について	4
体験学習ガイダンス	7
事前学習	8
行程表	11
学習内容	
・ 巨理町立荒浜中学校の被災	12
・ 巨理町の被災の実態	18
・ がれき処理プラントの稼働	22
・ 仮設住宅の設置と公助	26
・ 被災した荒浜小・荒浜中・長瀬小の見学	30
まとめ・感想	35

被災地体験学習を終えて

練馬区立中学生被災地体験学習引率者
練馬区立開進第三中学校長 柳谷 貞行

練馬区立中学生被災地体験学習実施概要

1 目的

練馬区の中学生在東日本大震災の被災地を訪問し、「自助・共助・公助」に関する具体的な事例や被災者の体験にふれることを通して、被災状況や復旧・復興状況、および人々の紐帯についての生徒の理解を促すことにより、将来にわたって地域防災に自律的に貢献できる中学生を育成する。

2 期 日

平成25年3月27日(水)～28日(木)の1泊2日

3 場 所

宮城県亶理郡亶理町

4 参加者

練馬区立中学校生徒80名(男子31名 女子49名)

5 引率者

練馬区立開進第三中学校長 柳谷貞行
練馬区立大泉学園中学校長 首藤盛治 以下10名

6 輸送方法

貸し切りバス2台

7 宿泊ホテル

阪急阪神第一ホテルグループ モンタナリゾート岩沼

〒989-2455

宮城県岩沼市北長谷字切通 1-1

グリーンピア岩沼内

TEL 0223-24-4455

FAX 0223-24-4459



引率者

〔教 員〕

練馬区立開進第三中学校長	柳谷 貞行
練馬区立大泉学園中学校長	首藤 盛治
練馬区立光が丘第四中学校主幹教諭	前田 康夫
練馬区立大泉学園中学校養護教諭	加藤 千晶
練馬区立石神井南中学校教諭	最上 知香子
練馬区立開進第三中学校教諭	畠山 太輔

〔事務局〕

練馬区教育委員会教育総務課長	岩田 高幸
練馬区教育委員会教育総務課庶務係長	清水 潤一
練馬区教育委員会教育総務課庶務係次席	橋本 真道
練馬区教育委員会教育指導課指導主事	三沢 亘潤

所属等は、参加時点のもの

参加生徒

()内は参加時点の学年

旭丘中学校	佐伯 ひかり(2)
豊玉中学校	迫 裕貴(2)、深野 水(2)
豊玉第二中学校	平栗 美乃里(2)
中村中学校	北澤 七海(2)
開進第一中学校	上原 皐嗣(2)、松田 遥奈(2)
開進第二中学校	西藤 悠馬(1)、高橋 麗帆(2)
開進第三中学校	伊藤 あかね(1)、大和田 優(1)、泉 千尋(2) 三浦 千帆(2)
開進第四中学校	横田 廉(1)、片倉 瞭(1)、片桐 静夏(1)
北町中学校	岡村 美穂(1)
練馬中学校	安藤 かれん(1)、杉山 梨緒(1)
練馬東中学校	坂本 大颯(1)、田口 ひかり(2)、鈴木 華(2)
貫井中学校	有本 明広(1)、小木曾 妃那(1)、大野 裕明(2)
田柄中学校	中村 月香(1)、杉本 果菜(1)、木村 光(2) 山内 陸生(2)、川端 利佳(2)
豊溪中学校	中久喜 皐(2)
光が丘第一中学校	斎藤 永和(1)、石森 晴夏(2)、岡本 りお(2)
光が丘第二中学校	櫛田 葵(2)
光が丘第三中学校	井上 颯(1)、駒林 舞(1)、村木 美香(2)
光が丘第四中学校	長澤 亜莉沙(2)、三田 茅乃(2)
石神井中学校	麻籬 陽平(1)、中村 環希(2)
石神井東中学校	斉藤 諄(1)、村山 菜々音(1)
石神井西中学校	土屋 智暉(1)、吉成 達也(2)、笠原 萌(2)
石神井南中学校	今久保 汐音(2)、大谷 瑞貴(2)
上石神井中学校	杉田 理恵子(2)、河島 貴絵(2)
谷原中学校	桑原 陸(2)、新野 翔梧(2)、人見 恭丞(2) 森田 百香(2)
三原台中学校	宮脇 一輝(2)、青柳 香織(2)、中島 ゆい(2)
大泉中学校	椎名 咲文(1)、山野井 剛(2)、船津 桃香(2)
大泉第二中学校	木村 優之介(2)、右今 はな(2)、中田 桜(2) 滝澤 まお(2)
大泉西中学校	奈須 海(1)、飯高 智貴(1)
大泉北中学校	小林 千夏(1)、瀬戸口 尚弥(2)
大泉学園中学校	道又 丈(1)、西田 未希(1)、柿崎 宏樹(2) 板坂 香月(2)、阿野 雄紀(2)
大泉桜学園 関中学校	小勝 周(1)、三田 大地(2) 松下 虎太郎(2)、陶守 笑摩(2)
八坂中学校	作山 優衣(1)、岩田 彩花(2)

亶理町について

(1) 東日本大震災前の亶理町

宮城県の南東部、福島県に近く阿武隈川と太平洋に面した町である。面積は、73.21 平方キロメートルで、その約 70%は海拔 3 ~ 5 メートルの肥沃な土地が広がる緑豊かな田園都市である。

仙台までは、JR 常磐線で約 30 分、車で約 40 分と通勤通学に適し、平均気温 13 度と温暖な気候と山・川・海が織りなす自然環境から、子育てや第二の人生を過ごすために転入する人々により、微増ながら人口は増えていた。

(2) 東日本大震災の概要

- ・地震発生： 平成 23 年 3 月 11 日 午後 2 時 46 分
- ・震源： 三陸沖 深さ約 24 キロメートル
- ・震度等： 亶理町では震度 6 弱を観測
(マグニチュード 9.0 最大震度 7)
- ・津波警報： 平成 23 年 3 月 11 日 午後 2 時 49 分
大津波警報発表(宮城県沿岸 6メートル)
- ・浸水面積： 約 35 平方キロメートル(亶理町の総面積の 48%)
- ・震災時世帯数： 11,442 世帯
- ・震災時人口： 35,585 人

(3) 被害状況(平成 25 年 3 月 10 日現在)

- ・亶理町民の死亡者数 306 人
- ・負傷者数 45 人
- ・火災 2 件
- ・住宅被害

地震被害によると思われるもの	全壊	99 棟
	大規模半壊	64 棟
	半壊	290 棟
津波被害によるもの	全壊	2,469 棟
	大規模半壊	222 棟
	半壊	630 棟
- ・がれき撤去の状況 推計 54 万トン

	第一次処理費	72 億円
	第二次処理費	459 億円
- ・亶理町内の避難所・一時避難所は、全て閉鎖されている
- ・全国 10 位の生産量を誇った宮城県産「仙台いちご」の 8 割を近隣

- 町村で生産してきたが、震災の津波により、約 95%のハウスが流された。
- ・練馬区は同町に対して、災害時相互応援協定を締結している長野県上田市と共に 9 次にわたり被災地支援にあたった。



被災直後のいちごハウスの被害状況（ ）（ ）



【被災前の巨理町の風景】



巨理町は、たくさんの家々が並ぶ住宅地であった



巨理町の春の風景（悠里館）

体験学習ガイダンス

平成 25 年 3 月 16 日 (土)

会場：南町小学校体育館

1 教育長あいさつ

練馬区教育委員会教育長 河口 浩

2 引率教員・同行教育委員会事務局職員紹介

3 引率者代表あいさつ

開進第三中学校長 柳谷 貞行

4 参加生徒紹介

5 体験学習の行程説明

6 体験学習における心構え

前田 康夫 主幹教諭

7 体験学習のための準備

前田 康夫 主幹教諭

8 体験学習のまとめ

畠山 太輔 教諭

9 健康カードの記入と健康管理

加藤 千晶 養護教諭

10 宮城県亘理町の被災状況などについて

震災対策担当課長 毛塚 久

11 事務連絡

12 質疑応答



事前学習

平成 25 年 3 月 23 日 (土)

会場：開進第二中学校セミナーハウス

事前学習の指導の要点

1

理科の学習の想起

2

地震の発生についての基本的な情報

3

安全な待避行動についての基本的な情報

4

規律ある集団行動

1 地震に関する基礎知識

- ・本単元は、中学校第1学年に配置されており、被災地体験学習参加生徒は、既に学習済みである。体験学習の前に関連する学習事項を想起し、用語および地震発生のメカニズムの科学的な理解を確かなものとした。
- ・ここでは、地震発生の仕組みと地震の特質について、キーワードを類似するカテゴリごとにまとめて提示した。特に、地震の規模を表す語句については、誤解が多いと考えられるため、重ねてふれた。

震度	マグニチュード
震源	震央
初期微動	主要動
震央・震源の分布	地震の原因



2 東日本大震災と関東大震災

- ・我が国が過去に経験した大震災について比較し、その相違点を知るとともに、東日本大震災が「津波の地震」であること、関東大震災が「火災の地震」であることに気付いた。
- ・被災地体験学習は、主に前者について体験することとなるが、内陸にある練馬区においては、依然として後者の視点を風化させてはならないことを実感した。

3 首都直下型地震の脅威

- ・東京都は、東日本大震災を踏まえ、平成18年に公表した被害想定を全面的に見直し、平成24年4月に公表した。練馬区としては、地勢的に見て、そのうち首都直下地震が関連する内容となるため、抜粋して示したものである。
- ・前ページの東日本大震災および関東大震災のデータと比較することで、「火災の地震」の危険性が依然高いこと、そして「帰宅困難者」という新たな視点から、地域防災における中学生の働きが期待されていることを知った。
- ・発災後の火災被害の甚大な地域は、都心のビル群を囲むようにドーナツ状に分布している。練馬区もそういった住宅街の一角を構成しており、火災への備えを怠ることはできないことを実感した。



4 大地震発生時の行動

- ・退避行動の原則として、自分の命を守る「自助」、身近な人を助ける「共助」について確認した。さまざまな発災状況に自律的に対処する方法を考えた。
- ・発災時の退避行動は、平常時の備えと密接に関連していることに気付いた。
- ・一見、当該の体験学習との関連が希薄であるように見えるが、実際の被災地訪問において発災当時の状況に触れる中で、当時の退避行動を客観的にとらえるための基盤とするとともに、自らの日常に視点を移し、自校の避難訓練の意義を改めて知った。



5 私たちにできること

- ・防災に関して、中学生の自分達にできることは何か考えた。
- ・自助および共助の視点から、発災前と発災時の行動をまとめた。

6 被災地体験学習で学ぶこと

- ・以上の学習の関連から、以下の観点で被災地体験学習の個人目標を立てた。

地震や津波の規模	... 「地震についての学習の復習」 「東日本大震災と関東大震災」
どんな被害があったか	... 「東日本大震災と関東大震災」
どのような退避行動をとったか	... 「大地震発生時の行動」
復興の状況	
私たちに何ができるか	... 「私たちにできること」

被災地体験学習 行程表

【平成 25 年 3 月 27 日 (水)】

時刻	内容	備考
7:15	生徒集合	本庁舎 1 階アトリウム
7:30	出発(バス)	
		途中、SA にて食事休憩等あり
13:30	巨理町到着	悠里館(巨理町駅前)
13:45 ~	巨理町教育長挨拶	
	講話・質疑応答 ...	荒浜中校長、教頭、主任による
15:30 ~ 17:00	仮設焼却炉見学 ...	
17:30	宿泊先到着	
18:00 ~ 18:30	夕食	
19:00 ~ 20:00	講話 ...	巨理町被災者支援課 仮設住宅班職員
20:15 ~ 21:15	入浴	
21:30 ~ 21:45	班長会	
22:00	消灯	

【平成 25 年 3 月 28 日 (木)】

時刻	内容	備考
6:30	起床	
7:00 ~ 7:15	朝会	(宿泊施設内芝生広場)
7:45 ~ 8:30	朝食	
9:00	宿泊先出発	
9:30 ~	荒浜小に到着 見学 ...	
	荒浜中見学	
	長瀬小見学	
11:00	公共ゾーン仮設住宅見学	(車中より)
11:30 ~ 12:15	昼食	
12:15	巨理町出発	
		途中、SA にて休憩あり
17:45	練馬区役所到着	

亘理町立荒浜中学校の被災

講師：亘理町立荒浜中学校主幹教諭 及川先生

1 未曾有の災害が町を襲った

2 災害に対する意識が命運を分けた

3 地域のつながりを生かして災害を乗り越えた

1 亘理町を襲った津波の被害

- ・亘理町立荒浜中学校では、発災当日（3/11）の午前中に卒業式を行っており、発災直前まで落ち着いた時間を過ごしていた。
- ・午後2時46分に、過去に経験したことのない激しい揺れがあり、その直後に、荒浜中に300～400人の町民が避難してきた。
- ・午後3時50分に巨大な津波が到来し、海岸の防潮林の松をなぎ倒しながら市街地へ迫って来た。その後、津波に流された松が市街地の家の窓や壁を突き破った。
- ・荒浜中に避難してきた方は、校舎3階に避難した。津波は次々と街を破壊し、建物とともに人が流されていく様子が窓越しに見えたが、為すすべが無かった。
- ・避難してきた方は、眼前の状況を見て「もうやめて」と叫んだり、「これからどうすればいいの」と落胆したりして騒然としていた。
- ・津波が引いた後も大量の海水が残った。理由は、第1に津波に運ばれたがれきが海岸付近で一種の堤防のようになって海水をせき止めたこと、第2に地盤沈下のため、市街地が海岸付近よりも海拔が低くなったことである。
- ・荒浜中付近が水没し、荒浜中だけが島のようになって孤立したため、避難してきた方は3日間、校舎内での生活を余儀なくされた。
- ・荒浜中のプールに船が乗り上げていた。
- ・当日は、雪は降らなかったものとても寒く、そして何より喉が渴いた。
- ・喉の渴きをいやすため、校舎屋上の水槽から水をくみ、分けて飲んだ。
- ・寒さをしのぐため、教室のカーテンを外し、毛布の代わりにした。また、



段ボール箱を開いてベッドのようにしたり、新聞紙を体に巻き付けたりした。ビニールのゴミ袋を全員に配り、首と両腕を通す穴を開けて身に着けた。

- ・トイレを流すために、1日に何度も校庭の海水をバケツリレーで運んだ。トイレの紙は、卒業式の飾りの紙製の花からホチキスの芯を外して分解し、伸ばして代用した。
- ・避難してきた幼児のために湯を準備する必要があり、理科室の実験用の炭を用いた。
- ・屋上の床にSOSの字を書き、ヘリコプターに生存と孤立を伝えた。
- ・被災2日目には乳幼児や病人が優先的にヘリコプターで救助され、翌3日目に自衛隊のヘリコプター5機により残る全員が救助された。
- ・3月14日(月)に全教員が校長室に集まり、生徒の安否確認を始めた。教員が手分けして避難所をまわり、避難者名簿から生徒の生存を確認した。最終的に荒浜中の生徒全員の無事が確認され、全員が涙を流して喜んだ。
- ・荒浜中に避難した方は、逢隈小に移った。避難所生活は4か月間続いた。逢隈小の体育館では、家庭ごとに仕切りを立てて区切った。自衛隊がテントで風呂を準備した。
- ・及川主幹教諭は、「子どもの学び支援ポータルサイト」にいち早く登録して支援を要請し、不足している物を一つ一つ揃えた。大学や海外からの支援が届けられた。
- ・震災は生徒の心に大きな傷を残した。未だに、余震のたびに顔が曇ったり、泣いてしまったりする生徒がいる。大切な人や大切な物を失った喪失感は計り知れない。



2 災害に対する意識の高さが、被害を抑えた

- ・亘理町は港町であり、日頃から地震と津波を結び付けてとらえる意識があった。
- ・荒浜中に避難した方の中には、津波に流されながらも九死に一生を得た方もいた。「生きるんだ」という意志がその命運を分けた。
- ・近隣の荒浜保育所では、発災前日の3月10日(木)に荒浜中に避難する訓練をしたばかりであった。60人の幼児はそのために全員が助かった。隣町では、園内での待機を選択して多くの人命が失われた例があったことを考えると、園長の決断が非常に重要であった。

3 地域のつながりで災害を乗り越えた

- ・地域の方はお互いによく見知っており、日頃からよく声をかけ合う間柄であった。

- ・津波の到来が予期される中、車で避難する人が知らない中学生を「何やってるんだ早く乗れ。」と言って車に乗せた例が見られた。
- ・消防団に限らず、地域の大人が自発的に独居老人宅をまわり、かついで避難させた。
- ・避難所では住民が地域ごとにまとまり、地区長を中心に教室に入った。統制がとれ、整然とした避難所生活が送れた。
- ・被災を通して、荒浜中の生徒の心に人を思いやる気持ちが育っている。先輩が後輩をいたわり、後輩が先輩のいたわりに応えようとするようになった。
- ・震災の衝撃があまりに大きく、2年間泣けなかったという生徒が最近やっと泣けるようになったと告白した。心の傷が癒えるのには時間がかかるが、人と人とのつながりこそが支えとなっている。

1

2

3

私たちは何をすべきか

1 災害の実際を知る

- ・報道されている情報は、実際の災害のごく一部であることを知る。
- ・東京都教育委員会が作成した防災教育補助教材「3.11を忘れない」や文藝春秋の臨時増刊号「つなみ」(平成23年6月刊)に児童生徒の手記が掲載されているが、そうした資料から実際の災害について知ることは、意義あることである。また、都内には関東大震災の資料館等もあり、自発的に災害について学ぶ環境が整っている。

2 日頃から災害に備える

- ・学校や地域で行う避難(防災)訓練の意義を理解し、真剣に取り組む。
- ・まず自分の命を守る(自助)ことが前提であるが、そのためにはどのような手立てが必要か、自分なりに想定してみることが必要である。
- ・下校後や夜間、休日など、家庭や地域で過ごしている時間に、「落ちてこない」「倒れてこない」「移動してこない」場所が確保できているか、家族と話し合う機会をもつ。

3 中学生として貢献できることを知る

- ・現在、地域防災の担い手として、中学生に大きな期待が寄せられている。
- ・実際に、発災後の荒浜中では、中学生が避難所運営に貢献し、地域を支えた。
 - 飲料水やトイレ用の水を確保するため、バケツリレーで水を運搬した。
 - 自分より小さな幼児・児童をよく世話し、心の安定を保つことに貢献した。
 - 吹奏楽部が避難所で演奏会を行い、避難している方を励ました。
- ・細やかな仕事から力仕事に至るまで、避難所の中学生はよく働いた。避難している方は、中学生に「負けていけない」と心に張りをもつことができ、支えになっていた例がある。中学生が「自分にできること」で貢献することは可能である。

感謝の言葉 大泉学園中学校 柿崎宏樹

ぼくの通う大泉学園中学校では、荒浜中学校への募金活動をさせていただいております。しかし、メディアは、巨理町をはじめとする被災地のことをあまり報道しなくなっているため、募金させていただいている立場にありながらも、巨理町、荒浜中の被災状況については、話でしか聞いたことがありませんでした。しかし、今日は実際にこの目で、耳で、心で感じ取ることができました。特に、友達同士、地域の住民同士の「絆」が命を救ったこと、生きるんだという強い意志のあり方が、これからのぼくたちの人生に生きると思います。

ぼくは、これからも募金活動に積極的に協力していくことを心に決めました。そして、募金を自分の活動で終わらせるのではなく、学校に残っているみんなに今日お聞きしたことを伝えていきます。

完全な復興まではまだ時間がかかるとは思いますが、絶対に風化させません。いつかまた、美しい巨理町、そして荒浜中が戻ってくることを信じています。

中学生の思い

(災害時には) あるものを探して何に使えるかを考えること、どんな状況でも生きる意志を強くもち続けること、この二つが大切なのだと思います。常日頃から考えておくことが、災害への備えになると感じました。 [豊玉第二中 平栗 美乃里]

まずは身近な人への気配りから始め、どんどん絆の輪を広げていきたい。実際に被災地に行っていない人にも自分たちの思いを感じてもらい、今の自分の行動を見つめ直し、日本の復興を応援していくことができればと思う。 [開進第三中 泉 千尋]

(防災意識について) 言われたままに形式的な事を繰り返すだけでは充分ではないと反省しました。今後は災害に対する想像力を働かせ、例えば災害時の家族との連絡方法や災害用備蓄品の状況について確認しようと思いました。 [貫井中 有本 明広]

(避難所では) 中学生や高校生が小さい子の面倒を見たり、地域の人同士で励まし合ったりしていたそうです。心に傷を負いながらも、他人のことを思いやれる気持ちをもつのは、とてもすごいと思いました。 [光が丘第四中 三田 茅乃]

(災害時に) どう避難したらいいのか、学校にあるものは全て使うこと、地域の人たちの協力が大切だということなど、被災地体験学習で学び、知ることができました。

[石神井西中 土屋 智暉]

(荒浜中学校の生徒が語ったという)「私は2年間、涙が出なかった。」という言葉が、いまだに頭と心から離れない。本当につらいことがあれば、人は涙が出ないのだと思った。

[谷原中 人見 恭丞]

私たちにとってのこの2年間は、「もう2年」かもしれませんが、現状は完全復興まで程遠いのです。つまり、この2年間は何年かかるか分からない完全復興までの道のりに過ぎず、「まだ2年」なのです。

[三原台中 中島 ゆい]

「君たちには東京の地で根をはってほしい」荒浜中学校の校長先生からうかがった印象に残る言葉である。「根をはる」ということは、普段から地域の交流を大切にし心のつながりを強くすることだと私は思った。

[大泉桜学園 小勝 周]



被災直後の荒浜中学校



津波は、住宅街を押し流した。学校は倒壊をまぬがれたが、1階部分は波に抜かれた。1階の窓ガラスは全て無くなり、ブルーシートで応急処置をしている。



解体工事中の
長瀬小学校
() ()



巨理町の被災の実態

講師：巨理町教育委員会 遠藤学務課長

1 津波は、予測できない動きをした

2 平常時には普通に行えることも、災害時には困難を極める

1 津波は予測できない動きをした

- ・地震発生の直後（午後3時）荒浜の鳥の海湾では海水が無くなり、水深5～6mの海の底が見えていた。漁業協同組合の組合長は、それを見てただならぬものを感じ、避難を急がせた。
- ・津波は福島側の茨城沖からの第1波と、岩手側の三陸沖からの第2波、そして正面からの波がぶつかり、渦を巻いた状態になった。
- ・津波は防潮林の2万本の松の大木を押し流し、その松の木が建物を破壊した。
- ・津波は高さ10mの高速道路を越えなかったものの、交差する道路が貫く間隙を抜けて市街地に浸入した。

2 がれきと海水、闇が足かせになった

- ・荒浜中に避難していた方へ食料を届けるために、陸路、荒浜中校舎への接近が試みられた。しかし、道路を塞いだがれきが障害となって前に進めず、最低限の通路を通すためだけに5時間かかった。
- ・発災後、救助活動のために道路を使えるようにと、町内の建設業者が5日間に渡って「寝ないで」がれきの撤去にあたった。これは、巨理町と建設業者団体とが、災害時協定を結んでいたことによる。
- ・地盤沈下により、海水中に孤立した荒浜中へ避難している方々を救助するために、全国からヘリコプターが集まった。しかし、校舎には十分な広さの屋上があったものの、ヘリコプターは着陸できなかった。そのため、屋上にライトを点滅させ、誘導灯として用いた。その結果、避難していた420人が、2日間で全員救助された。
- ・海水はなかなか引かず、泥の中で行方



不明者を捜索することは困難を極めた。1か月以上経ってから、竹やぶの泥の中から50～60人の遺体が発見されるなどした。

- ・多くの小中学生が、発災以降、何らかの形で人が流されていく場面や亡くなった姿を目撃している。心のケアが急がれたのは、これらの理由による。

1

2

私たちは何をすべきか

1 平時に学ぶ

- ・いつもと異なる現象には、何らかの理由があると考えて行動する。そのために、普段から周囲の状況をよく観察し、その変化に気付く感性を養うことが必要である。それは、災害に限らず、危険を回避する能力につながる。
- ・祖先から伝わる地域の言い伝えは、その土地の特質を言い当てていることがある。そのような過去の記憶に、注目してみる意義は大きい。年長者から学ぶ、地域社会から学ぶ、そんな謙虚さを私たちは忘れてはいけない。

2 がれきは重く、痛く、膨大にあり、他人の所有物である

- ・テレビやラジオ、新聞などで触れることのできる情報は限られている。災害時に実際に遭遇することは、想像を遥かに超えていることを理解すること自体が、一種の備えになる。例えば、倒壊した建物にはさまれた時の重さや痛み、道路ががれきに埋まって崩れやすくなっている状態、救助すべき人を複数発見したときの行動の選択など、災害時の「現実」をイメージすることが、自分なりの想定を形成することとなる。
- ・がれきとなる物は、本来、誰かの所有物（資産）である。よって、簡単に焼却すればよいというような単純な問題ではない。「絆」は、時にはこのような喪失を伴うこともあった。

中学生の疑問 Q & A

産業：いちご栽培の復興

- Q . 巨理町とその近隣の自治体は、国内有数のイチゴの産地であったことを調べました。経済的な自立を伴う真の復興のためには、こういった産業の復興が欠かせないと思います。そこで、農業に関する被災の状況と、復興に向けての計画等を教えてください。
- A . イチゴ農家は、その94%が津波の被害を受け、ハウスおよび露地ともに壊滅的被害を受けました。そこで、巨理町では、海水をかぶった農地の除塩（塩分を除く）作業を行いました。これは、農地の表土5cm分を撤去し、さらに川の水を張って塩分を溶かし込んで一挙に流す作業を2度行うものです。これによって農地が再生し、現在、80%の農地に作付できるようになりました。また、巨理町では、団地（大型ハウス）の再生に着手しており、今年度、3団地を稼働させます。これらによって、25ヘクタール分の作付を行い、12月には一気に東北一のイチゴ産地に振り返ります。主力銘柄であるイチゴ「もういっこ」は、関東地方への出荷も増やしていく予定です。

中学生の思い

（被災地の現状の中でも）希望の見える光景がありました。がれきをかき分けるように営業を再開している店舗や工場、そして今でも活動しているボランティアの方々。私もあの一部であり続けたい、そう思いました。 [旭丘中 佐伯 ひかり]

がれきはほとんど残っておらず、津波で浸水した所には、何もありませんでした。この状況を見て、復旧の早さに驚きつつ、ここに住んでいた人の大切なものまでなくなってしまったという喪失感で胸が一杯になりました。 [開進第二中 西藤 悠馬]

目の前に広がる景色は、建物がほとんどなく、わずかに家の基礎部分が残る程度でした。地震発生時にはそこにたくさんの家が建っていたことが容易に想像できて、やはりテレビなどを通して見る映像とは違う、事実の痛みを感じました。

[石神井西中 笠原 萌]

「ここは住宅地で、防波堤が全く見えなかった。」その言葉をうそだと思ったほど、何も無かった。ただ野原が広がっているだけだった。その時、津波の恐ろしさを改めて知った。そしてまた津波がこわくなった。

[大泉中 山野井 剛]

再建中のいちごハウス



がれき処理プラントの稼働

1 環境に配慮したがれき処理を行っている

2 地域経済の活性化に貢献している

3 地域の協力が、がれき処理を早めている

1 燃やせばよいというわけではない

- ・ 亘理町では、東日本大震災により、町民275人の人命の喪失の他に、53万6000トンの廃棄物および50万立方メートルの津波堆積物という爪痕を残した。
- ・ 宮城県は県内を四つのブロック（気仙沼 石巻 宮城東部 亘理名取）に分けて、それぞれのブロックにがれき処理プラントを建設した。処理費用として650億円が計上されており、19か月で全てのがれき処理を終え、平成26年1月にはその任務を終えて解体される。
- ・ 亘理町のプラントは、亘理名取ブロックのがれき処理を行うために建設された。
- ・ 亘理町の5基のプラントは、合わせて1日につき約525トンの焼却能力があるが、点検整備のために交替で1基ずつ休ませている。
- ・ 1日あたり約400台のトラックががれきを搬入している。持ち込まれるがれきは、様々なゴミが混ざった状態にあるので、土砂を取り除いた後、木くず 混合ゴミ コンクリート・アスファルトがら に分別して処理する。
- ・ 木くず5万8000トンのうち、4000トン分は再資源化され、残りの5万4000トン分は焼却される。
- ・ 最も多い混合ゴミ21万7000トンのうち半分の11万9000トン分は再資源化され、1万1000トン分は有価売却される。6万5000トン分はプラントで焼却され、残りの2万2000トン分は埋め立てられる。
- ・ コンクリートおよびアスファルトがら19万3000トンのうち、17万4000トン分は再資源化され、復興の建設用資材として活用される。



- ・焼却処分する中で発生する排出ガスに含まれる微粒子は、100%カットされる。
- ・搬入されるがれきは、放射性セシウム等による空間放射線量を計測し、安全性を確認している。

2 地域経済を抜きにはできない

- ・プラントは、地元の漁業共同組合や農業協同組合、商工会議所および企業から、優先的にCO₂排出枠を購入しており、地域経済の活性化に貢献している。
- ・プラントの従業員として、仮設住宅に入居している方を優先的に雇用しており、バスによる送迎も行っている。

3 がれきは誰のものか

- ・本来、誰かの所有物であるがれきを処理するためには、権利の放棄が必要になる場合がある。巨理町では行方不明者の搜索のため、がれき処理を平行して行った。全半壊した家屋の処理について、所有者に意向を明らかにしてもらい、処理を進めた。
- ・家屋の所有者が所有地内に旗を立て、その色によってがれき処理の可否について意向を明らかにした。

赤い旗 ...家屋や所有物の権利を放棄し、がれき処理を認める意向を示す

黄色い旗...家屋や所有物の処理について態度を保留する意向を示す

緑の旗 ...家屋や所有物の権利を放棄せず、がれきとしての処理を認めない意向を示す



膨大な量の廃棄物を分別する

1

2

3

私たちは何をすべきか

がれき処理の実際を知る

- ・東京都は被災地のがれき処理に協力している。復興に欠かすことのできないがれき処理の現状を調べ、その実際を知ることによって国を挙げて営まれる公助の働きについて理解する。

中学生の思い

(プラントでは) がれきの分別はとても細かくてびっくりしました。金属や木、木はサイズも分けて、リサイクルできるものはリサイクルしていました。できるだけ燃やす物を増やさない事が大切なんだと思いました。 [開進第二中 高橋 麗帆]

仮設焼却炉を見るとがれきがあり、胸が重くなりましたが、がれきはリサイクルできるように細かく分別していました。それを作業員が手作業で行っているところもあるとお聞きし、心強い力を感じることができました。 [石神井西中 吉成 達也]

がれきのごみとは違い、自分の住んでいた町、家、家族、友達の思い出がたくさんつまった大切なものです。そう考えると、がれきを処分するのは少しさびしいことだとも感じました。 [大泉第二中 中田 桜]

(廃棄物処理プラントの) 職員の方が説明してくれた中で、何度も繰り返しておられたのが、「できるだけリサイクルする」ことです。被災地でも環境への配慮を忘れないところにとっても感動しました。 [大泉西中 飯高 智貴]

(廃棄物処理プラントの) 避難棟から陸地の方を見ると、地平線までずっと原っぱでした。震災前は家が並んでいた場所です。津波はこんなにも広く多くのものを奪ったんだと改めて感じ、悲しくなりました。 [大泉北中 小林 千夏]

(仮設焼却炉では) もし地震があり、津波が来たとしても、作業員のために15メートルの高台を作るなど、作業員の安全も考えた場所になっています。僕は安全を最優先することが大切であると思いました。 [大泉学園中 道又 丈]

(焼却炉のプラントでは) 宮城や岩手のがれきの多さをこの目で確かめることができ、とてもいい体験になりました。また、こういう形で被災地以外の人が協力し合っていてすごいなと思い、憧れをもちました。 [関中 陶守 笑摩]

膨大な廃棄物からは、
膨大な量の灰が生じる。
灰の処理方法も工夫さ
れている。



講義は、2班に分かれて
行われた。
練馬区の中学生の環境
への意識の高さがうか
がわれた。

待避棟最上部
地上 15メートルの高さ
から見る被災地海岸沿い
は、見渡す限りの平原で
あった。



仮設住宅の設置と公助

講師：亘理町被災者支援課仮設住宅班 丸子さま・渡辺さま

1 仮設住宅への入居者は、公助によって支援されている

2 仮設住宅での生活は、現代社会の縮図でもある

1 仮設住宅は、入居者に応じた公助の支援の一つである

- ・仮設住宅の設置には、生活を再建しようとする人々の努力と、それを後押しする公助の働きという二つの営みがある。
- ・仮設住宅には現在1300世帯、3000人から4000人が入居している。
- ・仮設住宅は供給が間に合わず、一般アパートを町が借り上げて「みなし仮設住宅」として入居できるようにしたものもある。
- ・仮設住宅は1棟に6世帯が入居でき原則として入居者が1人世帯の場合は1DK、3人までの世帯の場合は2DK、5人までの世帯の場合は3Kの部屋に入居できる。
- ・仮設住宅の構造の改善が進み、以前に比べて住みやすくなっている。
- ・仮設住宅は家賃は無料であるが、光熱水費は自己負担で支払う。同じ被災者でも被災した自宅に戻って生活している方と、仮設住宅に入居している方とに差をつけることは得策でないことから、実費負担をお願いしている。
- ・仮設住宅への入居者には、日本赤十字社より冷蔵庫、炊飯器、電子レンジ、洗濯機、掃除機等が支給されている。
- ・収穫した野菜を地面や屋外に直置きしていると、ねずみによる害が発生することがあるため、生活習慣の見直しについて啓発している。



2 仮設住宅から見える現代社会

- ・仮設住宅に入居している方の中には、住宅を再建して退居する方とそうでない方との間に格差が生じてきている。
- ・仮設住宅には一人暮らしの高齢者の割合が高くなっており、いわゆる孤独死の問題が色濃く存在する。

- ・ 亘理町では、仮設住宅における高齢者の孤独死を防ぐために、集会所の職員や社会福祉協議会の生活支援相談員による見回り体制を強化しており、お年寄りへの声かけを励行している。また、健康体操を広め、高齢者の健康づくりを支援している。
- ・ 仮設住宅に入居できる期限は平成26年の夏までであり、その後は災害公営住宅への転居となる。
- ・ 仮設住宅に入居している方の中には、雇用や住宅など先行きに不安を感じている方が依然として多い。

1

2

私たちは何をすべきか

1 私たちの生活は、公助の恩恵を受けている

- ・ 税金は社会のいたるところに施策をともなって配分されている。東日本大震災の発災以降の被災された地域の方々の助け合い、思いやりの姿勢は、世界各国から称賛されているところであるが、その中で、役場や警察、消防署、自衛隊などの公的機関による公助の働きにも目を向けるべきである。災害発生後の迅速な対応は、事前の計画無しに行うことは困難であり、日頃からあらゆる災害を想定し、入念に対策を練り、訓練を続けてきた方々の努力によるところが大きい。そんな公的機関の仕事を理解するとともに、災害以外の平時における仕事を知ることは、将来の職業を主体的に選択するためのきっかけとなる。

2 現代社会の諸問題は、いずれ自分の問題になる

- ・ 新聞の社説やテレビの論評などを見聞きしたことがあるだろうか。有識者が英知をふるって述べる評論が、時に重要な警鐘となっていることは、震災に関しても言えることである。
- ・ 現代社会の諸問題が東日本大震災を契機に浮き彫りとなっている。過疎化や少子高齢化、産業の空洞化などの問題は、地域社会から地域防災の担い手を不足させている。これらの問題は防災に関わらず、いずれ自らが直面することになる。自分なりに考えをもち、社会に参画していく必要がある。
- ・ 被災地体験学習では、亘理町における地縁・血縁を超えた相互の助け合いの精神に触れることができた。地域における絆の在り方は練馬区においても重要なヒントになる。

感謝の言葉 練馬東中学校 鈴木 華

私は、いくつもの思いがあり、この体験に応募しました。

一つめは、いつもテレビや新聞で見ていた被災地を、実際にこの目で見てみたいと思ったことです。どのくらいの規模の津波だったのか、どのくらいの被害があったのか、自分の目で確かめたいと思いました。

二つめは、同じ日本の中学生が、今どのように暮らしているのか知りたいと思ったからです。私と同年代の人で家族や友達を亡くした人たちが、どんな気持ちでいるのか知りたいと思いました。

今日は被災者支援課の皆さんから仮設住宅のお話をいただきました。家を失うなどして困っている方のために働く「公助」の働きを知るとともに、震災の被害を受けながらも協力して支え合い、生活する方々の努力を知ることができました。私は改めて、今、私たちにできることを見つけたいと強く思いました。今までは募金をしていただけですが、これを機に、私が今回学んだことを学校の皆さんに伝えるなど、もっと自分なりのアクションをしていきたいと思います。

中学生の思い

仮設住宅では、住民の方々が明るく笑顔であいさつしてくださいました。今でもまだ心の傷は残っていらっしやると思うが、復興支援していく立場の私たちの方が逆に被災した方々の前向きな考えに励まされた気がした。 [開進第三中 三浦 千帆]

仮設住宅を実際に自分の足で歩いた時、窓から会釈をしてくれたおばあさんの顔ははっきり覚えている。笑顔だった。きっとあのおばあさんは自分の大事なものをたくさん失っただろう。でも私に笑顔をくれた。それをとても嬉しいと感じた。

[豊溪中 中久喜 皐]

被災地での生活は、震災前の平和さと変わってしまってとても苦しそうでした。ぼくが今、普通に生活をしているのは幸せだと思いました。被災した方々のことを考えながら生活をしていきたいです。 [石神井東中 斉藤 諄]

(仮設住宅の話の中で)「いつ何が起こるか分からない」ので、「いつ何が起こってもいいようにする」というのがとても心に残りました。 [谷原中 新野 翔梧]

仮設住宅では、被災者の方々から笑顔で「こんにちは」とあいさつされ、強いなと思いました。私は体験学習で被災者を援助するのではなく、被災者に助けられました。

[三原台中 青柳 香織]

被災した荒浜小・荒浜中・長瀬小の見学

講師：亶理町教育委員会 遠藤学務課長

1 いざという時の判断が、集団の生死を分けた

2 日頃の徹底した訓練が、迅速な避難に生かされた

3 地形の特徴が被害に影響する

訪問当時、荒浜小は改築済み、荒浜中は解体工事が完了して、プール以外全くの更地であった。長瀬小は解体工事の終盤に当たっていた。

1 命がかかる判断の重み

- ・亶理町立荒浜小学校の校長は、発災時の揺れの大きさから、大津波が来ると直観した。このことは、過去の宮城県沖地震等の経験を踏まえたものである。
- ・発災直後、荒浜小の校内には全校児童と教職員、そして車で児童を迎えに集まっていた保護者など850人がいた。
- ・屋上から海を見たところ、海が泡を吹いて接近している状況があった。
- ・荒浜小の校長は、津波の到来まで時間的猶予が無いこと 亶理町が海沿いの平野に位置し高台まで短時間で移動することは不可能なことから、校外への避難を行わないことを判断した。また、同じ理由で保護者への引き渡しは1人も行わず、保護者も含めて全ての人を校内に留め置き、学校として丸抱えする決断をした。そして全員を校舎3階に避難させた。
- ・亶理町立荒浜中学校は、発災当日の午前中に卒業式を行っており、生徒は帰宅済みであった。発災直後に450人の地域の方が避難してきた。
- ・荒浜中の校長は二次避難を行わず、避難してきた方を校内に留め置いた。
- ・津波は15時50分に到達し、荒浜中では2メートル30センチ、荒浜小では60センチの津波が観測された。校庭の周りには自動車が散乱した。
- ・荒浜小および荒浜中学校の周辺では、発災と同時に地盤沈下と液状化現象



が発生したため、津波の規模以上の甚大な被害をこうむった。

- ・ 荒浜中のプールの上に流されてきたクレーザーが乗っていた。
- ・ 荒浜小および荒浜中に避難していた方々は、命に関わる難を逃れることができた。



2 訓練は真剣にという信念

- ・ 亘理町立荒浜保育所では、偶然、発災前日に避難（退避）訓練を行っていた。
- ・ 荒浜保育所の前日の訓練では荒浜中に避難するという二次避難を主眼としていた。
- ・ 園長は日頃から避難訓練を徹底しており、0歳児から年長にいたるまで、成長過程に応じた避難方法を工夫していた。
- ・ 園長の徹底した訓練は、やり過ぎに見える危惧もあったものの、方針は揺らぐことが無かった。
- ・ 発災直後、園長は即座に荒浜中への二次避難を決断し、園児の命を守った。



3 地形の特徴からの判断

- ・ 亘理町では古来より、町を囲むように流れる阿武隈川が一種の堤防のようになって津波を遡上させ、減衰させてきた。東日本大震災では想定外の規模の津波が堤防によりせき止められたものの、交差する道路の貫く間隙から海水が平野部に浸入した。
- ・ 亘理町は平野部に位置するため、海水は拡散して高くないという状況があった。
- ・ 町民はこれらの地形特性をよく理解しており、逃げるべき方向を同町の北部と知っていた。
- ・ 宮城県北部および岩手県の沿岸の津波の被害が大きくなったのは、リアス式の地形のため、入江から湾内に浸入した波が逃げ場を失って厚みを増し、10メートルを超える高さに到達したことにある。地形により津波の様相も全く異なる。

1

2

3

私たちは何をすべきか

1 危機管理の想定をする

- ・災害および被害の想定の高さは、原子力発電所の例を挙げるまでもなく、身にしみて分かったことである。私たちにできることは、危機管理の想定である。つまり、どのようなことが起こったらどう対処するかという選択肢を数多くもっていることである。各学校には、「危機管理マニュアル」が完備されているが、家庭においても災害発生時の連絡方法や連絡場所、持ち出し品の共通理解など、できることは数多くある。
- ・練馬区では津波の被害は考えられないが、石神井川沿いの地域の液状化現象や、住宅地の火災の発生の可能性がある。まず、自分の命を守る、...このことは人任せにはできない自分の問題である。
- ・同じ震災で同じ津波で甚大な人的被害を受けた学校の危機管理について検証することも大きな意義がある。

2 訓練は真剣に行う

- ・言い古された感があるが、この一言に尽きる。
- ・訓練でできないことは、本当に必要な場面でできない。そして、本当に必要な場面は、不意に訪れる。

3 地形の特徴を知る

- ・練馬区は、武蔵野台地の上に位置し、比較的安定した地盤で高低差の少ない平地である。海岸からは遠く、津波の心配は考えられない。
- ・練馬区の直下には固い岩盤と表層との間を地下水が流れており、これが湧水の源となっている。このことは、大規模地震が発生した際に石神井川沿いで若干の液状化現象を引き起こす可能性があると考えられる。
- ・練馬区における発災時には、火災への備えが必要である。練馬区は、計画的な街づくりが行われており、火災にも比較的強いといえるものの、関東大震災の轍を踏むことなく、対策をとることが必要である。



感謝の言葉 石神井南中学校 今久保汐音

私の両親は阪神淡路大震災の被災者で、命に関わるようなことはなかったけれど、家が壊れたりしてとても大変だったと幼い頃から聞かされてきました。

東日本大震災でもテレビなどで情報を得ていましたが、被災地体験学習を通して震災の恐ろしさや被災者の方々の苦勞を間近に感じました。

一方で、失ってしまった家・学校・町などの復興がどんどん進んでおり、人々の心の強さを知ることができました。

やはり、何かを通して感じるということだけでは分からないことがあるし、自分の目で直接見て感じるということに勝ることは無いと思います。

実際に私が被災したわけではないので、被災した方々が経験されたご苦勞は分からないかもしれませんが、被災地の力になれるように、日本中のみんなで頑張っていきたいと改めて強く思いました。

中学生の思い

3.11の被害の大きさをいつまでも忘れないでいきたいと思います。地震は人々が忘れかけたところに急にやってくるものです。だから心にとめておかなければいけないと思いました。 [豊玉中 深野 水]

巨理町の死者数が少なく済んだ理由は、震災前に避難訓練をやっていたからでもありました。だから、毎月の避難訓練を面倒くさがらず、真剣に取り組むことがこれからにつながると思います。 [中村中 北澤 七海]

復興が思っていた以上に進んでいたのがうれしかったです。長瀬小は校舎を建て替え中でした。ただ、今まで使っていた校舎が無くなるのは、とても辛いことだなと思いました。 [開進第四中 横田 廉]

長瀬小はちょうど解体中で、ブルドーザーがバリバリと大きな音を立てて校舎を壊している最中でした。私は胸が苦しくなりました。 [北町中 岡村 美穂]

プールを見ると更衣室の窓が割れていて、プールの中の壁も全てが破壊されていました。私は目の前にあるものが信じられなくて、言葉が出てきませんでした。

[練馬中 杉山 梨緒]

被災地で見たプールの時計は津波が来た時間で止まっていた。人々の中には震災の日からずっと時間が止まっている方もいらっしゃると思う。それでも少しずつ笑顔の回数を増やして生活してほしいと願っている。

[練馬東中 田口 ひかり]



(荒浜保育所では) 震災前日に避難訓練を行っており、震災当日、全員無事であったと聞きました。自然災害はいつ起こるか分かりません。だから日々の訓練にしっかりと取り組むことは本当に大切なことだと思います。

[田柄中 中村 月香]

被災地体験学習で一番印象に残っているのが、荒浜中学校の創立五十周年記念碑です。もともと校庭の隅にあったのですが、津波で校庭の真ん中まで流されてしまいました。ぼくは何もない更地にポツンとたたずむ石碑を見ただけでとても悲しくなりました。

[光が丘第三中 井上 颯]

(荒浜小や荒浜中の訪問では) すごく潮のにおいがしたことを覚えています。プールだけ残った荒浜中は、生々しい傷跡が残っていて復興もまだまだだと思うと同時に、もっと支援しないと改めて感じました。

[石神井東中 村山 菜々音]

荒浜中では、プールだけが残っていました。その周辺も津波被害を受けた家などがあつたそうですが、もう取り壊され、ほとんど何もありませんでした。そんなプールを見ていたら心が痛みました。

[三原台中 宮脇 一輝]

(荒浜中では) 卒業した生徒、近くの保育所の園児が亡くなることはありませんでした。地域の一人一人の防災意識が高く、地域全体が強い絆で結ばれていたからこそ、こういった奇跡につながったのだと思いました。

[大泉第二中 右今 はな]

(被災地の海岸の) 何も無い地面に立ったときに考えてみました。あんなに静かで美しい海が全てを飲み込んで追ってくるなんて想像もつきませんでした。それはまるで空想の中の出来事のように、同じ国で起こったことには思えませんでした。

[大泉学園中 板坂 香月]



「津波襲来の地」碑（宮城県亶理郡亶理町内）



まとめ・感想

感謝の言葉 豊浜中学校 中久喜 皐

皆さん、この2日間はどうかだったでしょうか。

練馬区の生徒代表として、しっかり自分の目標を果たせましたか。

私は今回の体験で、特に人と人とのキズナが大切だということを学びました。

巨理町の皆さんが地震や津波、そして身近な大切な人の死などの大きな困難を乗り越えて生きてこられたのは、やはり、強い地域のキズナがあったからこそです。

例えば、知らない子供にも避難をうながし車に乗せる。あるいは地域のお年寄りを背負って一人一人助け出すなど、行動の原動力になっていた例がいくつもありました。

このことから、私たちも自分たちでこれからを支えていけるよう、もう一度地域の安全や町の安全を確認し、自主的に未来への行動を起こしていこうと思います。

私はこの体験学習で新しいキズナを手にしました。それは、生活班、学習班の仲間です。みんな中学校は違いますが、同じ目的で集まった人たちです。被災地の様々な状況を目にしながら、それぞれ思いを共有し、考えを交換し合いました。

家族から遠く離れて宿泊し、そして今、多くの方のお出迎えを見て、私自身が既にもっているキズナの大きさを実感しました。

たくさんの人とのキズナが私とつながっていることをうれしく思います。

このように、もうもっているキズナ、新しくできたキズナ、そしてこれからどこかで出会う未来のキズナを大切にできる人に私はなりたいです。



中学生の思い

国際化とローカル化という（どちらも重要で）対極にある二つの流れの中で、僕たちがどこに立てば良いのかということが今後、重要になるだろうと思いました。被災地でこんなことを考えるとは思いませんでした。 [豊玉中 迫 裕貴]

ぼくらはまだまだ子供です。しかし、できること、手伝えることはとても多くあります。その一つ一つはとても小さい物かもしれませんが、小さくても力になれることがあります。もし今の自分にできることがあるなら全力で取り組みたいです。

[開進第一中 上原 皐嗣]

貴重な体験を一生忘れず、もし大地震が起きたら自分がリーダーシップをとれるようにしたいです。そして友達や家族だけでなく地域の人、近所の人など多くの人に被災地のことを伝えられたら良いなと思います。

[開進第一中 松田 遥奈]

私はこの大震災を語り継ぎ、風化させないことが大切だと思います。被災地は復旧が進むと復興です。今、私たちにできることは、被災地の現状を正しく理解し、みんなに伝え続けることです。

[開進第三中 伊藤 あかね]

貴重な体験をさせていただき、今の日本に必要なだと感じたことがあります。それは、隣の方と交流をもたないことなどによる孤立化を無くすことです。マンションの隣の方とすれ違った際にあいさつすることでも、問題の解消につながるはずです。

[開進第三中 大和田 優]

この二日間でぼくは震災についての考えが大きく変わりました。今回の学習で、震災の現状の他にも、被災した方々の思いなどが少し分かった気がします。

[開進第四中 片倉 瞭]

震災で亘理町の人々の命を救った方法の一つは共助でした。その中でも、津波が来る恐怖をとめないながらご老人を助けた消防団の行動にはとても驚かされ、勇気ある素晴らしい行動だと感じました。

[開進第四中 片桐 静夏]

私がこの被災地体験学習で大切だと思ったことは、地域の人たちと交流することと避難訓練です。東京で巨大地震が起こったとき、地域の人たちがすぐに声をかけ合うとは思えないので、自分から毎日あいさつをしようと思いました。 [練馬中 安藤 かれん]

巨理町の人々の行動・知恵・協会全てが絆となり、そのことが死者を減らした大きな要因となりました。そのことをぼくらが伝えていけば、東京で大震災が起きた時にも、死者を減らすことができると感じました。 [練馬東中 坂本 大颯]

今ここにいる私は本当に幸せ者です。家族がいる、友達がいる、学校で勉強する、どれも当たり前のことのように思いますが、全てそろっているなんて奇跡と言っても良いくらい恵まれているのだと思いました。 [練馬東中 鈴木 華]

今の日本に欠落しているものがはっきりと分かります。それは起きていることの正しい情報を正しく受け止め、それにふさわしい行動をとることです。そして自分が学んだことから情報を共有し合うことです。 [貫井中 小木曾 妃那]

大災害が起きた時、「自助・共助・公助」ということがどれだけ重要なのかということを考えさせられました。このことは、ぼくにとって一生忘れられない出来事になったと思います。 [貫井中 大野 裕明]

被災地体験学習を通して、「私ができること」について考えることができました。日頃から、いつ地震が起こっても対応できるように準備を整えること、地震が起こった時の行動・判断を身につけることなど、対応の仕方はいくらでもあります。 [田柄中 杉本 果菜]

体験学習に行く前は、ニュースを見て「かわいそう」「ひどい」と思うだけでしたが、体験して「被災した方々の力になり、1秒でも早く復興・復旧させたい」と強く感じています。将来、何か人のために仕事をしたいと思いました。 [田柄中 木村 光]

巨理町の人々が大事なことを教えてくれました。それは地域での助け合いです。人間が一人で生きていくのは不可能だと思います。だから、お互いに協力し合うことが大切だとぼくは思います。 [田柄中 山内 陸生]

体験談の中で、「自分は流された人を助けられなかった」「すさまじい音とともに街が消えた」など、家が津波にのみこまれて流されていく様子を直接うかがい、自然災害がどんなに恐ろしい底力をもっているか知りました。 [田柄中 川端 利佳]

一瞬で1万6000人もの人々をうばった東日本大震災を風化させないこと、そしてこの東日本大震災という出来事を次の世代の人に伝えること。この二つは日本人に与えられた使命だと思っています。 [光が丘第一中 斎藤 永和]

命はこの世で一番大切に、消えると悲しみとなるものなんだということを感じた。もっとも地域のみなさんと仲良くなって、すぐ地震があったとしても対応できるようにしたいです。

[光が丘第一中 石森 晴夏]

貴重な話、貴重な場所の見学、そして復興のために頑張っている皆さんのことを一人でも多くの人に話し、皆の記憶の中からあの日の出来事を消さないようにしたいです。

[光が丘第一中 岡本 りお]

首都直下地震が近いうちに起こると言われていて、被害の想定はとてつもなく大きいものです。そうならないために、防災訓練、避難訓練と隣同士の絆を深めていきたいです。

[光が丘第二中 櫛田 葵]

(被災地体験学習で学んだことを) 私から家族や友達に、そして家族や友達からその友達や家族、そのまた友達、家族...というような伝えていく無限ループをたくさんつくっていかねばいけません。

[光が丘第三中 駒林 舞]

(「絆」の意味を踏まえて) 意見を言い合って、協力し合って、一つのものを作り上げることの大切さを改めて実感しました。今、私たちができることというのは、学校でいろいろなことを経験し、いざという時に団結できる力を身に付けることだと思います。

[光が丘第三中 村木 美香]

(東京に対しての要望はという質問に対して) 被災者の方々は、東京で大きな地震が起きたときのために、地域の交流を深めてほしいと願っていたことにとっても驚かされました。

[光が丘第四中 長澤 亜莉沙]

地震や津波は無くすことはできないけれど、避難訓練や近所の住民との普段からの関わり合いを大切にすれば、被害は小さくできるんだと思いました。

[石神井中 麻薙 陽平]

絆はお互い年月をかけて作り上げるものであり、短い期間ではできません。被災された巨理町の皆さんは、「家族の絆」「友達の絆」「地域の絆」があったからこそ、厳しい環境での生活を乗り越えることができたのです。

[石神井中 中村 環希]

命の尊さ、絆の大切さに改めて気付けたことが一番大きな収穫です。絆はつくるものではなく深めるものであって、人と人とのつながりを大切にしていれば自然と絆が生まれて、深まっていくのではないかと思います。

[石神井南中 今久保 汐音]

私にできることは、自分の住んでいる地域に大きな地震が起きたときのために、被災地で学んだことを周りの人たちに伝え、受け継ぎ、行動していくことだと思います。

[石神井南中 大谷 瑞貴]

(荒浜中の生徒は)同じ中学生なのに他人のことを思いやるというしっかりした考えをもって、自分たちにできることを見付け、行動をしたというところに感動しました。

[上石神井中 杉田 理恵子]

(被災地体験学習は)改めて自分の生活を見直すよい機会でした。何よりも自分にとって大きいことは、みんなの思いやりや絆でした。私は被災地に行って絆ということを学びました。

[上石神井中 河島 貴絵]

(校舎が)これだけの被害を受けても、荒浜中の生徒は誰も死者を出さずに助かったのは、地域の絆があったからこそだと思いました。この絆が練馬でもできるようにしていけたらいいと思います。

[谷原中 桑原 陸]

(被災地の方々の努力にふれて)自らの目で震災を見て、自立して生きる意志をもち、どんな時でも工夫をして前向きでなければならないと思いました。

[谷原中 森田 百香]

被災地体験学習では、自分にできることを改めて考えてみました。ただ募金をするだけでなく、自分が募金したお金がどのように使われるか考えることもよいのではないかと思います。

[大泉中 船津 桃香]

東京に首都直下地震がきたら、何人の人が生き残ることができるんだろうと思いました。大勢の人が助かるためにも、今から周りの人と絆を深めることが大切だと思いました。

[大泉中 椎名 咲文]

もっと近所とのコミュニケーションを図る必要性を感じました。「行ってらっしゃい」など言われても、おじぎくらいしかしないぼくなので、最初は「行ってきます」から始めようと思いました。

[大泉第二中 木村 優之介]

柳谷校長先生は「心のつながり」は「命のつながり」だとおっしゃっていました。私は、本当にその通りだと思います。みんなで励まし合って震災を生きのびてきたからこそ、今があるんだと思いました。

[大泉第二中 滝澤 まお]

被災地に行ってみて、思うように復興が進んでいない現状があるものの、一步一步、先に進んでいることも確かだと思った。これから10年、20年経って、街がどのように発展していくかが楽しみである。
[大泉西中 奈須 海]

命の危険にさらされた中でも、助け合おうとする気持ちはすごいことだと思いました。これから先、大規模な地震が起きるかもしれないので、自分が厳しい時でも、共に支え合える気持ちを身に付けておきたいです。
[大泉北中 瀬戸口 尚弥]

私は自分の生活を見直さなくてはいけないと思いました。隣の人顔は知っているけれど、何人家族などはほとんど知りません。みんなで生きるために地域と心をつなげるといふことの大事さを感じました。
[大泉学園中 西田 未希]

日本は地震の多い国ですが、被災者への支援をもう少しできれば、少しは地震への不安を和らげ、今も被災地で頑張っている人もちょっとは安心できるのではないかと考えました。
[大泉学園中 柿崎 宏樹]

東京でも70%の確立で大地震がくると言われているので、その時は、もちろん自分も助かっているんな人を助け、一人も亡くなることの無いようにしたいし、東日本大震災で力になれなかった分、力になりたいと思いました。
[大泉学園中 阿野 雄紀]

被災地体験学習では生きていくことの力強さを改めて感じました。それは被災した人たちが一人で災害に立ち向かっているのではなく、家族、地域、社会とお互いに協力し合い、自助、共助、公助の精神を常にもっているからだと思いました。
[大泉桜学園 三田 大地]

震災が人々の生活に、そして心に付けた爪痕は計り知れないものだと思うと同時に、これは現在進行形の震災なのだと思います。
[関中 松下 虎太郎]

元々住んでいた所に戻れた、街の状態が元に戻った等のことは“復旧”であり、被災した方々が心に負った傷が本当に消えた時、その時が本当に“復興”した時なのではないでしょうか。
[八坂中 作山 優衣]

被災地体験学習で他校生と結ぶことのできた絆を含む、今までに結んできた絆や今後どこかで結ばれる絆を大切にしていきたいと思います。
[八坂中 岩田 彩花]

引率者の思い

春の気配が感じられた3月27日・28日、宮城県亶理町を練馬区内中学校80名と練馬区教育委員会の方々、区内の校長先生、ならびに先生方で訪問しました。

亶理町の方々から歓迎を受け、早速、東日本大震災が起きた日のことを荒浜中学校の先生が画像を交えてお話をしてくれました。清野和夫校長先生は、被災した生徒の気持ちを、「ある生徒はこの二年間涙を流すことができませんでした。悲しみが深すぎて涙が出てきませんでした。」と伝えてくれました。「生徒の思い、悲しい、つらい、怖い、そういう感情を出していいんだよ。」このようなアドバイスを阪神淡路大震災を経験した臨床心理士のお話を紹介してくれました。被災地の人々の悲しみを何一つわかっていない自分を深く感じました。

次の日には荒浜中学校のあった場所を訪ねることができました。私は、昨年八月に現地を訪れ、荒浜中学校の先生に案内され、校舎を見学することができました。一階にはブルーシートがはられて、津波の被害を目の当たりにすることができました。当日2011年3月11日荒浜中学校は、卒業式が行われました。二階に上がると、その形跡がありました。すなわち、二階の教室の黒板に大きく「卒業おめでとう」と書かれた文字を発見しました。一年半経過しても、そのときの文字が残っていました。さらに、屋上に案内され、屋上から東を見ると、美しい太平洋を見ることができました。こんなにも美しい海が、あんなにも残酷な仕打ちをするなんて。そんな思いがしました。わたしにとって、小さいながらもそういう思い出のある荒浜中学校。その中学校が今回行ってみると、その跡形もありませんでした。「あったものがなくなる。」というその喪失感、この気持ちは、荒浜中学校の生徒・先生・地域の方々にとってどんなにつらいものだったのだろうか。自分の想像をはるかに超えているように感じました。また、亶理町では、306名の方々がお亡くなりになりました。「いた人がそこになくなる」その喪失感も計り知れない深いものだと感じました。東日本大震災の「悲しみ」の深さを改めて感じました。

その一方、区内の生徒は、被災状況を真剣に自分の目で見、人の話を聴き、自分の心で感じ取っていました。そのことを帰校してから各中学校で発表されたことと思います。そういう取り組みが私たちの未来への大きな「希望」であると思います。

そして、そのような企画すなわち被災地体験学習を計画してくださいました練馬区教育委員会、並びに、亶理町教育委員会に敬意を表します。

[練馬区立大泉学園中学校 元校長

東大和市立第四中学校 現校長 首藤 盛治]

私は今回の被災地体験学習で区内の代表生徒と3・11のあの日の亘理町の状況を、現地で「見て」「聞いて」「感じて」きました。実際の被災地は復興が進んでいるとはいえ、まだまだ途上でありました。私たちにとって「あの日」から学ぶことは多くあります。その中で今回改めて感じたことは、人と人とのつながり(絆)でした。亘理町では、震災前から結ばれていた地域の人々の絆は多くの人の命を救い、被災後もその絆が励まし、支えとなっていました。予想される災害に対して備えをすることは当然必要なことであり、東日本大震災から2年が過ぎた今、各地域がまだ復興途上であることや多くの地域で備えが不十分であることは喫緊の課題です。しかしそれ以上に私たちの普段からの人と人とのつながりは大切であり、毎日深めていくことができます。日々、自分が接する人たちと声を掛け合い励まし、時には支え合い、心でつながった友人や学校・地域をつくることは、今自分たちでできる大きな防災対策ではないでしょうか。

[練馬区立光が丘第四中学校 主幹教諭 前田康夫]

一泊二日という短い時間でしたが、生徒たちと共に被災地を訪れ、たくさんのことを学んできました。また、現地の方はとても親切で、私たちに津波の恐ろしさや、そこから得られた教訓を丁寧に教えてくださいました。まだまだ震災の傷跡は胸に残っているに違いないのに、当時のことを話して下さり、感謝の気持ちでいっぱいです。生徒たちにとって貴重な経験になったことと思います。

震災から約2年経った今でも、現地は津波の爪痕は至る所にありました。中でも印象に残っているのは、被災した荒浜中学校のプールです。ここには2m40cmの津波が襲ってきたそうです。ポンプ室は泥まみれ、手すりもあり得ない方向へと折れ曲がっていました。東日本大震災のすごさが伝わってきました。その様子を生徒たちは、神妙な面持ちで見つめていました。私自身も、もし勤めている学校で同じことが起きたら...と思うととても恐ろしく感じました。

被災地体験学習を通して学んだことは、普段からの避難訓練と地域・仲間との絆を強めておくことです。いつ来てもおかしくない巨大地震に備え、今からできることをしておきたいと強く思いました。そして、今回学んだことを生徒たちに伝えると共に、これからの生活に生かしていきたいです。

[練馬区立石神井南中学校 教諭 最上知香子]

今回、被災地体験学習に参加した生徒は、実際に巨理町に行くことでテレビではわからなかった震災の被害の大きさや、被災者の方の悲しみ・苦勞、そして復興へ向かう力強さを肌で感じる事ができたと思います。ただ、それだけで終わらず、自分たちが見て、聞いて、感じた被災地の現状をそれぞれの学校の生徒たちに伝える役目を果たしてくれることを期待しています。巨理町で迎えてくださった多くの方の思いを受け止め、それを次の人に繋げて、今回の被災地体験学習を自分たちの防災に活かす「はじめの1歩」にしてほしいと思います。私自身も体験学習に参加した一人として、被災地がまだ復興途中であることを忘れず、生徒たちと一緒に支援を行っていきたいと思います。

[練馬区立大泉学園中学校 養護教諭 加藤千晶]

東日本大震災から二年の月日が経ちました。私は、昨年三月まで気仙沼・南三陸管内の中学校で講師として勤務していました。その後、東京の教員として着任し、震災の風化や宮城と東京に暮らす人々との防災意識の差を目の当たりにしてきました。ですから、心の中には「いつか宮城と東京をつなぎ、復興・防災を志す生徒を育てたい」という強い思いがありました。

巨理町といえば、山・川・海といった自然豊かな環境に恵まれた町。阿武隈川で楽しんだ釣りや、荒浜で食べた郷土料理の「はらこめし」、名産品のいちごなどが記憶の中にありました。しかし、何年かぶりに訪れた巨理町も震災による甚大な被害を受けていました。がれき焼却プラントの光景、仮設避難所から見えた荒浜の海辺、更地になったかつての町、解体された校舎の喪失感と悲壮感、今日という一日を生きることができなかった人々の命。一泊二日の短期間ではありますが、直に被災地の現状を目の当たりにしました。参加生徒80名は、しっかりと被災地の現状と向き合い、本当の気持ちと心で、地域防災の継続と学んだことの発信を誓っていました。震災の教訓を風化させず後世に伝えていくために、衣・食・住のありがたさ、人や地域とのつながりの中で生きること、生かされていること、学ぶことの意味、学べないことの意味、それらを日々の学校生活全体を通して生徒と共有することを心掛けようと思います。また、一教員として、今回の経験や教訓を防災教育に活用しながら、ふるさとを想い、復興を支える「人づくり」を目指していくことに努めます。

[練馬区立開進第三中学校 教諭 畠山太輔]

被災地体験学習を終えて

被災地体験学習に学ぶ ―「3.11 を忘れない」―

練馬区立中学校 1・2 年生 80 名、引率者本部 6 名、引率教員 4 名は、3 月 27 日からの 2 日間、宮城県亘理町で「被災地体験学習」を行いました。この教育事業の目的は、練馬区の中学生在が東日本大震災の被災地を訪問し、「自助・共助・公助」に関する具体的な事例や被災者の体験にふれ、被災状況や復旧・復興状況、および人々の紐帯について生徒の理解を促すことにより、地域防災に自律的に貢献できる中学生を育成することにあります。

参加生徒は、大震災に対する高い関心と防災への学ぶ意欲が極めてあり、2 回の事前学習を主体的に受け、練馬区の中学生の代表という意識を強くもち、参加しました。亘理町では、教育委員会の方々、中学校の先生方、町役場被災者支援課の方々から地震直後の状況や生徒と学校の状況・津波による被害・救助の状況・避難所や仮設住宅の状況等を聞き、被災状況の写真を見ました。津波被災した荒浜小学校・荒浜中学校・長瀬小学校、災害廃棄物処理施設、仮設住宅を見学しました。改めて、津波の脅威と凄まじい被害状況を知りました。また、災害時の人々の共助の大切さを知りました。参加生徒は被災や復興の状況などを体験学習することを通して、震災の事実を継承するとともに、今後、防災について考え、災害時の自らの役割を考える機会となり、多くの学習成果を得ることができました。

「3.11 を忘れない」は防災教育補助教材のタイトルですが、この言葉を実感致しました。

参加生徒は、各学校において被災地体験学習の報告を行い、防災教育の一貫として取り組みを進めています。これからの時代において、中学生が守られるべき対象にとどまらず、生涯にわたって自らの安全を確保できる基礎的な知識を身に付け、さらに他者や社会の安全を意識して活動する力を身に付けることが求められています。防災教育を学校、行政、家庭、地域が更に連携し推進していくことが必要であると改めて実感致しました。

練馬区立中学生被災地体験学習引率者

練馬区立開進第三中学校長 柳谷 貞行

練馬区立中学生被災地体験学習 報告書

(平成 25 年 3 月 27 日～28 日)

平成 25 年 (2013 年) 5 月

練馬区教育委員会